

平成27年度第1回（被服学・美術デザイン）分野連携グループ合同委員会議事概要  
学系別FD/ICT活用研究委員会（被服学）  
サイバー・キャンパス・コンソーシアム運営委員会（美術デザイングループ）

I. 日時：平成27年12月15日（火）16：00～18：00

II. 場所：私立大学情報教育協会事務局

III. 出席者：被服学グループ

阿部委員長、倉委員、小原委員、石原委員  
美術・デザイングループ  
久原委員（スカイプ）、宮田委員（スカイプ）  
事務局 井端事務局長、森下

III. 議事概要

1. 出席委員の紹介

委員会開催にあたり、被服学グループ・美術デザイングループの出席委員の自己紹介が行われた。

2. 報告・検討の概要

(1) 平成27年度の事業計画の説明の後に平成26年度の事業報告書から昨年度の分野別のアクティブ・ラーニング対話集会の活動内容が報告された。

(2) 平成27年度の活動計画

資料①により、分野連携による対話集会の目的及び開催方針の説明が説明され、対話集会の進め方について意見交換された。

3. 意見交換の概要

(1) 対話集会の目的、計画、進め方などについて

学生の主体性を引き出し、伸ばす授業が求められることから自ら問題を発見し、答えを見出し実践できる力を育むアクティブ・ラーニングについて、昨年度は分野ごとにアクティブ・ラーニングのイメージについて共有した。今年度は「対話を通じて課題を発見し、課題解決に向けた学びを主体的・協働的・創造的に展開していくアクティブ・ラーニングの手法とそれを実現していくための授業運営の工夫」、「組織的に推進していくため教学マネジメントの工夫」について対話集会を通じて考察を行う。

- ・ 対話集会は、分野連携の9のグループ編成で行うこととしている。
- ・ 被服学・美術デザイングループを1つのグループとして分野連携で対話集会を開催する。
- ・ 分野共通のテーマでアクティブ・ラーニングを考えるのではなく、各分野の先生の知見、分野ごとの視点でテーマを検討するのがねらいである。

(2) 話題提供や意見交換のテーマなどについて委員の意見

- ・ 2つの分野以外からの参加、アクティブ・ラーニングを実践している教員、少し興味を持ってはじめてようとしている教員、そんなに興味持っていないが取り合えず参加する教員など幅広い参加者を念頭に考えなければいけない。
- ・ 先生ご自身の意志で来ていただき、大所高所から気づいていただければというふうに考える。
- ・ 議論に参加しないまでも何かその中から、役に立つような情報を持ち帰っていただけるようにしたい。
- ・ 最近、地域連携を各大学で強化してるが、教員だけではなく、事務と学生が入って取り組んでいる事例などが紹介できればよい。

- ・ 失敗事例なども参考になる。アクティブ・ラーニングの失敗事例というハンドブックを中京地区の大学が取りまとめたものがあり、せっかくセットアップしたのだけど、学生の素養を理解して地域に参加させないと上手くいかない事例や学生達が気づいて企画を立てないといけないのに、先生が入れ知恵してしまって失敗した事例などが報告されている。
- ・ この分野では創造という要素がが重要でいろいろな分野、いろいろな背景を整理して、新しいものを発想していくということが知識の創造を目指したアクティブ・ラーニングに当てはまる。
- ・ 本当は知識の定着、確認であって、それを使って見て、その次が創造、この3段論法で考えることが必要。
- ・ 基礎知識は必要だが、どちらかというと活用と創造が一緒になってしまってくるのかと思う。
- ・ もの作りでは、ものに意味があるのではなくて、どういう人にどういうふうに使われるのか。それが人間関係、コミュニティ、社会的な文脈の中で初めて意味が出てくると思う。ものを作るということはものだけではなくて、人間関係を作ったり、コミュニティを作ったりとか、そういうところで見て初めて意味がある学びになるような気がしている。そういう意味では、もの作りの分野では地域の連携とか、それからいろいろな分野との連携というのが、アクティブ・ラーニングの要素としてすごく重要なのではないかと思う。
- ・ 中京大学と椋山女学園大学が地域の企業と連携して取り組んでいるプロジェクトで、主にももの作りのワークショップを地域で展開するという活動の論文があるので紹介できる。大学と地域の企業、市民活動などと学生が協力して、その地域でのワークショップ活動というのを展開している事例で、どんな学びがあったのか、参加した学生がどのようにして学んできたのかまとめてある。学生にとってはいろいろな意味でアクティブ・ラーニングの成功した面もあるし、難しかった面もあるが、何か参考になることがあればと思う。
- ・ 地域連携でのアクティブ・ラーニングをいろいろと議論するというのは参考になる話題だと思う。
- ・ 地域連携のアクティブ・ラーニングというのは一つテーマになりうるのではないかということ。被服や美術デザインでは、制作したものが地域や組織、場合によっては国を越えて大きな役割を果たし、国民のアイデンティティにも繋がります。こういう今の国民のアイデンティティを、表現していくためにも、日本独特の衣装について、大学としてどういうふうな世界に向けて学びを展開していったらいいのかなと思う。被服の世界をいろいろと見直してみるという手も一つの方法だと思う。
- ・ アイデンティティというものと、衣装というものがすごく密接に結びついているなということで民族、地域性、歴史などを背景に、どう表現していくかは大きなテーマで、大事な表現手段なのです。
- ・ 欠席の美術デザインの先生から2つテーマとして久原先生の「インタラクティブメディアに関連したテーマとしてライブパフォーマンスにおけるアーティストの衣装へのプロジェクトマッピングの演出の提案」は衣装を取り上げてくれたので良いと思う。これは提案となっているので、今後の新しい試みとして取り上げたらどうか。
- ・ 東京家政大学の有馬先生の専門能力の向上を目指すICTを活用した教育プログラムの工夫では、グラフィックデザインとか、デジタルデザインのアプリケーションの進化が早く、それに合わせて表現のコンセプトの進化も早いということで、そのへんをICTとデザイン教育をどのように導入していけばいいのかというようなことを検討したいといった

ご意見をいただいている。

- ・ ICTをデザイン教育にどのように導入していけば良いのか。デザイン教育をやる上でICTを使って役立つことがあれば考えましょうという形にすればどうか。
- ・ 質の保証ということでは、基礎学力を身に付けさせる必要があり、そこがクリアしていないと、地域連携とかアクティブ・ラーニングに結びつかない。
- ・ 初年次に出来るだけ早く取り組ませる試みとして、FSP研究会があり、20大学、企業60社位が取り組んで効果をあげている。
- ・ アクティブラーニングの評価とか検証はどうしているのか。プロジェクト学修とかやっているが、どう評価して、効果を測定していくかに皆悩んでいる。
- ・ 効果は失敗から気づいて、自分たちできちんと勉強するところに持って行くことが成功、あとは、自分で学びに気付いて、自分で学びに入れるということ。
- ・ 被服の関係の科目でどういう知識とか、科目の到達目標にあわせたアクティブ・ラーニングを考えることなのか。
- ・ 科目とは関係なく、アクティブ・ラーニングというところで線引きしている。知識を組み立て、何か知識を、新しいものを創造しよう。そういうレベルでテーマでやっていきたいと思っているので科目とかは関係ない。美術・デザインと連携できるのもそういうこと。
- ・ アクティブ・ラーニングを議論するところで、どういうレベルのアクティブ・ラーニングを狙うか、知識定着レベルを狙うか、それを活用して知識と連携してとか、又は独自のものを作るためにそうするかなど。あと、裏側にある教育政策をみんなで考える場にしたい。
- ・ 話題提供は1時間で、2～3人、何をまず議論しようかというテーマを決め、テーマからどんな話題を出してもらおうか。あくまでも話題を提供してもらう素材として考えたい。
- ・ テーマを先に決め、テーマが決まったら、話題提供は委員やよその大学の先生とかにお願いして話題提供いただくようにしたい。
- ・ 宮田先生から論文も紹介いただいたが、地域連携は学びの通用性を振り返るという意味でも重要なことだし。それから学生に、その学びの動機付け、意欲を喚起させる意味でも、失敗も含めて、とても重要な環境だと思う。
- ・ 自分たちで学んだ成果を、地域の中で使ってもらって、いったいどうだったのかということは、かけがいのないたぶん体験だと思います。ですから、それを被服のレベルとか、または美術・デザインのレベルで、社会とか地域連携の中で、何か、こういうところで、こういうふうにいる使ってみたらどうだろうかとか、もっと学生が生き生きとしてくるのではないかとかというふうにも思う。
- ・ 美術・デザインとコラボするのであったら。特に今、地域連携というのはこの大学でも今騒いでいることだし、ちょうど、上手く後付けできるかもしれません。
- ・ 2020年のオリンピックを控え、日本をアピールするのは意味があります。
- ・ まさにそこで、大事なことは、オリンピックに来た人たちが、こういう地域に行ってみたいとか、都会だけではなくて、だから5年間の準備期間がありますので、日本として発信して、地域で発信して、こういう日本に素晴らしい、いろいろな世界にない文化だとか。誇るべきものがあるのだよと。
- ・ 大学がむしろ拠点になって発信していくというのが、一番、地域創生の先鞭を付けられるのではないかと。被服や美術・デザインくっつけて、いろいろと学生もやってみようかということになって、非常に盛り上がってくるのではないかとと思うのです。こういう大きなパラダイムがありますので、そういうものを上手く使って、この際そこに学びを繋いでいくというか、関連づけしてみるというのは非常にいい格好かもしれない。それがアクティブ・ラーニングになるのではないかと。
- ・ そういう仕掛けを例えば大学で考えていくときに、結局すべての授業でやるわけではありませんので、大学として、何かどこかの学年次で、そういう体験をさせていけばいいと思う。

大学としてどういう応援、支援が必要でそれができないとやりたいと思ってもできない。例えば大学のメディアセンター等が支援し、教員がその中に入っ取組むことが大事になる。

- ・ 2、3人の話題提供はこのメンバーからでなくても良い。
- ・ 宮城学園女子大学が地域連携を家政学会でいつも発表している。
- ・ 椛山女子大学と中京大学でやっている地域連携テーマがあって、あと2つくらいテーマに合わせた話題提供を検討したい。
- ・ だいたいおおまかなテーマを、議論すべきテーマを決めたい。
- ・ 今まで議論した地域連携等を踏まえて次回、美術系の先生のご意見を入れて決めたい。
- ・ 先生方に本日の内容を流して、ご意見もいただいたうえで、2回目を開ければと思っております。

#### V. 今後の予定

次回に日程はメールでご都合を伺い、1月から2月初旬に開催、対話集会の開催要項を検討することにした。また、できれば、対話集会のテーマ、取り組みの事例、意見発表してもらえそうな話題について事例を自薦他薦問わず持ち寄っていただき開催要項をとりまとめることにした。